

NPO 法人

小金井雑学大学

第 23 号 平成 28 年 2 月

だより

学ぶ心

小金井雑学大学 代表理事 五十嵐京子



新しい年が明け、今年初めての第410回講義が行われました。テーマは「幽霊の額の三角の謎」で、面白いテーマに多くの受講生とJ-COMの取材も入りました。講師はさすが大学の教授をされていた方だけあってあちこちの文献を調べ、調査に歩き、それを基にしての講義でした。雑学大学の講師にはこうした専門家もいらつしやいますし、サラリーマンをリ

タイアした後には自らの興味を地道に調べてその成果を披露してくださる方もいらつしやいます。

昨年、感心したのは植物の命名をするときのルールについての講義でした。少々難解な講義でもありましたが、講義後にお聞きしたのは、今専門家でもそのルールをわかる人が少なくなっているということ。また、地域の歴史や自然のお話をされる方については、自分の足で地道に知識を積み重ねている姿を見ます。さらに、江戸しぐさの講義をされた講師からは、言い伝えとして伝承されたことで書いたものが残っていないという実態も伺ったことがあります。

いわゆるメジャーなものではないことでも、人は自分自身の興味で答えを見つけようと探求していきます。人の話を聞くことも学びではありますが、究極の学びは自分の興味を探索する心ではないかと思えます。インターネットの普及ですぐに知識が手に入る時代になったわけですが、実は基となる情報は人が入れるものであり、その情報も様々な理由で伝わらないもの、消えていくもの、知られていないものが多いのが実態ではないかということを考えました。中には重要な意味を持つものもあります。そうした講義に接した時には雑学大学をやる意義を改めて感じます。小金井雑学大学は今年の春18周年を迎えます。多くの学ぶ心を持つ皆さまに支えられての18年でしたが、学ぶ心がある限り雑学大学は続くと思っています。)

小金井雑学大学の魅力

小金井雑学大学 元理事 仙石善四郎

小金井雑学大学は、今年3月で開講18周年を迎えます。その間休講なしで410回の講義を続けられたことは、まことに快挙です。それは理事の皆様方のご努力と講師の方々のご協力により達成されたものと思いません。

私は最初は東京雑学大学の講義を時々聴いていましたが、小金井にもあることを知ってから15年近く小金井雑学大学に通っています。



周年記念講演の懇親会にて

人生も終わりに近づいて、今さら学びでもなكارうと言う人も多いのですが、私は学びの連続が人生だと思っているのです。その精神をよく表現しているのが江戸末期の儒学者佐藤一斎の「言志晩録」に出て来るつぎの言葉です。原文は漢文ですが、訓読文を引用します。

「少くして学ばば、則ち壮にして為すあり。壮にして学ばば、則ち老ゆとも衰へず。老いて学ばば、則ち死すとも朽ちず。」です。その老いて学ぶ絶好の場所と師を、ほぼ無償で提供してくれるのが、小金井雑学大学の魅力なのです。

昭和初期生まれの私達は、「少」の年代が丁度戦争と重なり、学校教育は荒廃、偏向し、

あまり学んでいないのです。また「壮」の時代で、仕事以外のことはあまり学ぶこともなく、気がついたら「老」の域に達し、ようやく学ぶ時間を得たのです。

そのとき出会ったのが小金井雑学大学です。講義のテーマは多岐に亘り、内容も玉石混淆の感はありますが、同じテーマについて、毎年継続している講義は雑学大学の支えになっていると思います。例示すると田部井先生の「漢文と中国文明」・兵頭先生の「西洋史」、高樋先生の「万葉集」、吉田先生の「忠臣蔵」などですが、特筆すべきは兵頭先生の西洋史講座です。開講から10年間は年1回、その後8年間は年2回計26回、主として西洋史について自作の資料にもとづいたユーモアに富んだ講義を聴き、勉強不足の西洋史に開眼しました。このような継続講義の講師を増やし、長続きされんことを、願って止みません。

18周年記念講演のお知らせ

「自治体首長と求められるリーダーシップ —スグレ首長、ダメ首長—」

島津 隆文氏（松蔭大学客員教授）

3月20日（日）14時～15時15分

会場は萌え木ホール（商工会館3階）です。

どうぞお楽しみに



地域包括ケアシステムの必要性と医師会の役割

小金井市医師会 会長 斎藤 寛和

日本の少子高齢化は他国に類を見ないスピードで進行しています。出生率の低下により全人口は減少し、2100年には5000万人台になると予想されています。

一方平均寿命の延伸により高齢化率(全人口に占める65歳以上人口の割合)は35%に達すると言われており、団塊の世代が後期高齢者となる2025年には国民の生活に様々な支障が出る事が予想されており、いわゆる“2025



第393回講義 4月13日

年問題”と呼ばれています。この危機を乗り越えるために、「医療・介護・予防・生活支援・住まい」の5本の柱からなる“地域包括ケアシステム”の構築が急がれています。

医師会が担う医療の分野では、“かかりつけ医による在宅医療”が課題となっています。急性期医療に偏った病床数を慢性期やリハビリテーションの病床に振り分ける地域医療構想が検討されていますが、慢性疾患を抱えた高齢者をすべて病院に収容するのは困難と考えられています。また、患者さんのニーズも多様化しており、住み慣れた地域・住まいで最期を迎えたいという方も増えています。このような要望に応えるべく在宅医療の提供体制や介護の方々と連携を進めています。中でもI

CTと呼ばれるスマホやタブレット端末を用いた連携システムを導入して患者さんの情報を迅速にやりとりする事を目指しています。近い将来には遠隔医療システムへの発展も期待されています。

もう一つの課題は“認知症対策”です。わが国の認知症高齢者の数は、2012(平成24)年で462万人と推計されており、2025(平成37)年には約700万人、65歳以上の高齢者の約5人に1人に達することが見込まれています。団塊の世代が75歳以上となる2025(平成37)年を見据え、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会を実現していかなければなりません。

医師会では市と協力して「物忘れ相談シート」を導入しています。このシートは患者さんの認知症に関する情報が簡潔に整理されたもので、病診連携や医療・介護の

連携をスムーズにしてくれます。

市内に4つある地域包括支援センターに相談すれば一緒にシートを記入して医療機関を受診することができます。認知症初期集中支援チームも活動を開始しました。これは医療・介護の複数の専門職が認知症の疑いや認知症の人及びその家族を訪問し、必要な医療や介護の導入・調整や、家族支援などを行うチームです。医師会ではこのチームに必要な認知症サポート医の養成に力を入れており、現在4人のサポート医が活動しています。さらに、地域の認知症対策の中心となる認知症疾患医療センターや認知症ケアパス*の整備も進めているところで

*** 認知症ケアパス：発症予防から人生の最終段階まで障害の進行に合わせていつ、どこで、どのような医療・介護サービスを受ければよいのか、これらの流れをあらかじめ標準的に示したもの。**

江戸糸あやつり人形

結城座 制作部 澤田麻希

小金井雑学大学の活動については、前々から、市報でのお知らせをはじめとして、小金井や近隣の文化関係者の方々、結城座の座員からお噂は聞いており、ぜひ機会があれば参加してみたい(拝聴者として)と思っておりましたものの、いかんせん、この職業柄、土日の本番や打合せ等とぶつかってしまったり…という状況でした。

そのような中で、雑学大学



第400回講義 8月2日

から講師依頼のご連絡を頂きましたので、嬉しい限りでした。しかし、実はご依頼いただいた日時が、ちょうど十二代目結城三郎はじめ人形遣いが稽古でお伺いできない日でした、これはお断りせざるを得ないかも、と暗澹たる気持ちでご相談したところ、必ずしも人形遣いでなくても、結城座のことを話してもらえればOKとの温かいお言葉を頂きました。お噂に聞いておりました初の雑学大参加が、傍聴者としてではなく、何とお話する方の側での参加となったわけです。

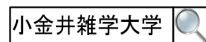
普段は裏方の人間ですから、ずいぶん緊張しながら、お伝えすべきことを忘れてたりしないようにと、事前にレジュメを作成

して臨みましたことを覚えております。ちょうど、お呼び頂いた平成27年度は、9月以降に小金井市での活動が多かったのでそのことを中心にお話し申し上げましたが、質問タイムでは、小金井での活動だけにとどまらず、海外で公演を行った感想を聞かれました。「小金井と結城座」についてはお答えできるようにと、事前に色々な準備をしていたのですが、思わぬところからの質問。皆様のご関心の広さにたじろぎつつも、アメリカ、フランス、ブラジル、ベトナム、過去に自分が参加した海外公演を、急遽・必死に思い起こしながら、お答えしたものです。終始、緊張しながらも、質問等の交流の時間を交え皆様の温かい応援のお言葉を頂きながら、何とか、お話しを全うすることができました。

改めまして、8月2日という暑い盛りにもかかわらず、たくさんお運び頂きましたことに、

深く感謝申し上げます。これもおとえに運営の皆様のお力のおかげと存じます。本当にありがとうございます。益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

「雑学だより」のバックナンバー(カラー)は小金井雑学大学のWEBサイトでお読みいただけます。



編集後記

暖かくて野菜の収穫が間に合わないかと思えば、寒くなって沖繩で雪が降ったり、体にも厳しいこの頃です。そのせいではないのですが、少し遅れて「たよりの」23号をお送りします。昨年にも多様なジャンルの先生をお招きすることができました。今年も皆様と一緒に雑学大学を楽しみたいと思います。

田中留美子 記

発行責任者 五十嵐京子